



犯罪史上に名を残す

変質者に狙われています

昔から怪談や都市伝説などがスキだった俺は、大学で「事故物件サークル」に所属。

事故物件、おもに人の死に関連しての曰くつきな部屋や建物を調査、研究する変人奇人のたまり場だ。

学生や、その身内、友人知人と幅広い情報網からネタを探したり。ネットでも日々、うってつけの噂を掘りおこしたり、情報提供を呼びかけたり。

で、興味がそそられる事故物件を見つけたら、許可をとるなど準備万端にして現場へGO。

決して、ヤラシをせずに、事故物件の状態をありのまま録画し、説明や解説も交えて。

帰ってきたら、調査内容をまとめて、現場の動画を編集したものと合わせて研究結果を発表。

動画の再生数は一万くらい。

チャンネル登録者数は五千人くらい。

とくだん褒められ感心されるほどではないが、コメントには、熱心なアンチより、熱心な支持者のほうが目立つ。

「ヤラセとか大袈裟な演出をしないから、じっくり見られるのがいい」  
「現場を忠実に記録しようとして、なにも起こらないのが、むしろ怖くていい」

広告料はほとんど入らなくても、彼らがけっこう活動資金を提供してくれる。

大学からの援助を受けられない、弱小日陰サークルにはありがたく、欠かせない支援者だ。

ただ、コメントから読みとれるように知的レベルが高そうな人なので、安っぽくミーハーなネタは扱えない。

とのことで、今回、メンバーが見つけてきたのは、明治時代に建てられた、西洋風の石造りの屋敷。

建てられてから、すぐに手放され、それからずっと山奥に埋もれていた超目玉、事故物件だ。

もちろん、曰くつきで、その内容も一級もの。

明治時代に山奥に立派な屋敷を建てたのは、白樺家。

貿易によって財を成した一家で、次男がこの屋敷の主。輸出用の品物、その原材料をつくるのを任されてのこと。

誰も住んでいなかった山を開拓し、屋敷を建てるほかに、作業員が生活できるよう小さな町をつくった。

雇用主である次男は、山の天辺に君臨するように、ご立派な屋敷に住みつ、作業員の扱いを大切にし、親切に面倒を見ていたという。

雇用主と作業員の関係はよく、原材料づくり、収獲、出荷と仕事ぶりも問題なく、順調にすすめられたいたはずが。

ある日、作業員が畑で水やりをしていると、急に男の子が藪から跳びだし「助けて！」と。

男の子はあきらかに異様だった。

女物のようなフリルがついたブラウスに半ズボンなんて、上等な身なりからして一般庶民の作業員たちの子供ではない。

その子と遭遇した作業員は、すばやく的確に状況把握と判断ができる人だったのだろう。

「どうか、屋敷の主に知られないよう、べつの町につれていって！」との涙の訴えを聞きいれ、こつそりと男の子をつれて山奥を放れた。

隣町につくと、屯所（今でいう交番）で彼は屋敷の秘密を暴露。

屋敷の主、白樺家の次男は、幼い男の子を好み、全国から攫ってきているとか。

失踪しても、心配して探す人がいない、哀れな境遇の子ばかりをだ。

彼らを屋敷の地下に監禁して、不自由なく生活させながら、肉体関係を強要。

しかも、声変わりする、身長が伸びるなど、子供らしくなくなったら、用済みとばかり殺すとのこと。

耳を疑うような証言だったが、山奥に突然、高級なシルクのブラウスを着た男の子が出現したのに、ほかに説明のしようもない。

これは捨て置けない重大犯罪だと判断した、一番階級が上の巡査は早速、部下と町の力自慢の男を連れて、山奥の屋敷へ。

ただ、屋敷の人間が事前にその情報をつかんだらしく、聞きつけた次男は逃亡。

屋敷に監禁された子供を助けるのに何人か置いて、巡査は追いかけて、とうとう崖を背にした次男に迫った。

が、間に合わず。

「悔しいぞ！なんと悔しいことか！

わたしは諦めぬぞ！死んでも夢を叶えてみせる！」

そう遺言を叫んで、崖の下に身を投げたという。

死体は見つからなかったとか。

